



「共に生きる社会」の実現をめざして

IUHW

International University of Health and Welfare

vol. 116
January
2019



成田キャンパスで国際交流親善パーティー

新春のごあいさつ

高木邦格理事長

大友邦学長・三浦総一郎大学院長、各病院長・施設長

第9回高校生作文コンテスト

三田病院で国際医療機能評価JCIの認証更新

海外保健福祉事情

国際医療福祉大学・ 高邦会グループ理事長

高木 邦格



◆ ◆ ◆
2019年を迎え、皆様にご挨拶を申し上げます。

国際医療福祉大学は1995年の開学から来年2020年には節目となる25年目を迎えるにあたり、本年もさまざまなプロジェクトに邁進する1年となります。現在、卒業生は2万3千人を超え、栃木県をはじめ千葉県成田市、神奈川県小田原市、福岡県福岡市および大川市、また東京都港区赤坂の6キャンパスに10学部24学科を持ち、大学院生を含め約8300人の学生が学んでおります。

昨年開設いたしました東京赤坂キャンパスでは、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部と、医学研究科（公衆衛生学専攻・修士課程、医学専攻・博士課程）を新設した大学院とが一体となった教育を

行っております。今後、成田キャンパスの医学部とも連携しながら、我が国最大規模の医療福祉系総合大学院として、学部とともに国際的な學術拠点をめざしてまいります。

成田キャンパスでは、世界最大級となる5300㎡超のシミュレーションセンターが完成し、大半の授業を英語で実施するなど国際性を重視した革新的な医学教育が行われております。今後医学部では研究にも力を入れ、将来的には世界的な研究拠点となるよう注力していく所存です。また、成田市畑ヶ田地区に2020年に開設する国際医療福祉大学成田病院の建築もおかげさまで順調に進んでおります。成田病院は国際遠隔画像診断センターや感染症国際研究センターなどを整備し、東京オリンピック・パラリンピックも見据えながら、海外からの患者様にも対応できる質の高い医療とサービスの提供をめざします。すでに開設準備室を立ち上げており、人材不足が懸念されるなか、開設に向けて新たに2000人を雇用するなど、総事業費1千億円のプロジェクとして、緊張感を持って取り組むべき1年となります。アジアを代表する世界的なハブ病院をめざし、教職員一丸となって頑張つてまいります。

国際活動につきましては、20年以上にわたって密接な交流があるベトナムの国立チョーライ病院と共同で、昨秋ベトナム初となる日本水準のドック健康センターを開設いたしました。国際医療福祉大学三田病院や東京の山王病院、

成田キャンパスの医学部と連携しながら、遠隔による放射線診断や病理診断のダブルチェックを行い、高品質な人間ドックを提供しております。グループとしては海外における初の人間ドック事業ですが、現地での好評を維持しながら今後軌道に乗せていきたいと考えております。また、モンゴルの教育省と奨学生の受け入れに関するMOUを締結いたしました。医学部に加え、リハビリテーションスタッフなどメデイカルスタッフを養成する学科において今後5年間、本学が授業料から生活費まで全額負担するフルスカラーシップで、モンゴルから最大50人の奨学生を受け入れてまいります。これにより、モンゴルにおけるチーム医療の根幹や基本的な制度設計にも貢献してまいります。

このほか、海外における協定先も41の大学・機関・病院へと拡大いたしました。今後もこれらの提携先と引き続き関係強化を図るとともに、一層の国際医療貢献をめざしてまいります。

関連施設につきましては、国際医療福祉大学病院が新たに研究棟を建設、今春には55床増床のための新病棟が稼働いたします。また敷地内に、臨床実習中の学生が宿泊するほか患者様のご家族がご利用いただけるよう、113室の那須マロニエホテルと、県北では初となる病児保育施設を併設した認定こども園・西那須野キッズハウスを開設いたしました。さらに今春、特別養護老人ホーム栃の実荘が増床してリニューアルすること、乳幼児から高齢者までの総合的な

国際医療福祉大学学長

大友 邦



◆ ◆ ◆
2019年の新春を迎え、皆様にご挨拶を申し上げます。

東京都港区赤坂に本学6つ目となる東京赤坂キャンパスを昨年開設し、4月から赤坂心理・医療福祉マネジメント学部を新設しました。青山キャンパスから移転した大学院と一体となった臨床重視の教育が始まっています。

同学部の心理学科は本学にとって新しい領域ですが、5つの附属病院や山王病院での実習を生かし、他の専門職と協力・連携するチーム臨床をモットーに「心のエキスパート」を育成する先進的な教育環境の構築を進めています。一方、医療マネジメント学科は大田原キャンパスの同学科の実績を踏まえ、医療福祉専門職とチーム医療・チームケアに携わり、病院経営の安定に貢献できる人材を育てています。今は新築の校舎に学部生は1学年

123人が在籍していますが、今年は2期目の新入生を迎え、学生数が増え、にぎやかなキャンパスに成長していくものと期待しています。

医学部2期生140人が昨春に入学した成田キャンパスでは、Ⅱ期棟（WA棟）の使用が開始されたことで、世界最大級の「シミュレーションセンター」での最先端教育が始まりました。今年は医学部の最高学年が3年次になることから、総合的診断能力と国際性を身に着け、医師国家試験合格に向け高い能力を持った学生の育成に取り組んでいきます。

来年は4月に大川キャンパスで福岡薬学部を新設する予定です。大田原キャンパス薬学部の経験を活かし、九州における薬学教育の拠点づくりを目指します。一方、成田キャンパス近くには成田病院を開設し、附属病院は6病院に拡充します。医学部に隣接し、成田空港にも近く、アジアを中心に海外とのネットワークの拠点となり、「世界的なハブ病院」をめざします。

今年は、新しいキャンパス、新しい学部を安定的に運営していきます。そのうえで、来年の新学期、新病院のスタートに向け、着実な準備を重ねていきます。グローバルな目を持った学生を育て、世界と地域に先導的に貢献できる医療従事者集団を輩出していききたいと考えています。

新しい年も、教職員一同、精いっぱい努力してまいります。一層のご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

国際医療福祉大学大学院長

三浦 総一郎



◆ ◆ ◆
新年を迎え、新春のご挨拶を申し上げます。

昨年4月、本学大学院は医学部と連携して、4年制の医学専攻（修士課程）と2年制の公衆衛生学専攻（修士課程）を擁する医学研究科を新たに開設致しました。現在、4研究科、8専攻、48分野に90以上の領域やコースを有する我が国最大規模の医療系総合大学院として多彩な学びの場を提供しております。また同じく昨年4月に青山にあった大学院を移転し、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部とともに東京赤坂キャンパスにて新しいスタートを切りました。移転後約10カ月を経過いたしましたがお陰様で多くの学生を迎え入れることができ、充実した施設設備の中で学部・大学院が一体となつて順調に運営させていただいております。

本学大学院は、保健医療福祉の分野で指導的役割を果たすことができる高度医療専門職の育成を目的に開設されましたが、本年でいよいよ20年目の節目の年を迎えます。社会人の方でも働きながら学ぶこ

教育と福祉の拠点が誕生いたします。今後も地域の皆様にも求められる高度で専門性の高い医療をご提供できるよう、一層地域医療に貢献してまいります。

大学における新増設といたしましては、九州で本年4月、グループの学校法人高木学園が福岡山王病院の隣に福岡国際医療福祉大学を開学いたします。理学療法士・作業療法士・視能訓練士・言語聴覚士などのリハビリテーション専門職を養成する福岡市初の4年制大学として、姉妹校となる国際医療福祉大学と連携しながら福岡地域における優秀な人材を育成してまいります。

また、来春には国際医療福祉大学・大川キャンパスに定員120人の福岡薬学部・薬学科の開設を予定しております。私立大学で全国1位の国家試験合格率を持つ大田原キャンパス薬学部と連携しながら、きめ細かな薬学教育を行ってまいります。さらに、成田キャンパスにも来春、千葉県で唯一となる診療放射線技師の養成校となる放射線・情報科学科の開設を予定しております。千葉県における診療放射線技師不足に対応すべく、大田原キャンパスの実績をもとに地域医療に貢献できる人材の育成をめざしてまいります。

本年もさまざまなプロジェクトがございますが、グループ教職員一丸となつて取り組んでまいりますので、よろしくようお願い申し上げます。最後に、新しい一年が皆様方にとって充実したよい年でありますよう祈念し、私のご挨拶とさせていただきます。

とができる環境を提供するとともに、医療分野において必要とされる新しい分野や領域を常に開拓し、大きな発展を遂げてまいりました。本年4月には、新たに医学研究科公衆衛生学専攻に医療ビッグデータやAIの活用を目指した医療福祉データサイエンス領域を設置予定であります。今後、教育・研究環境を一層充実させ、日本をリードする国際的な「知の医療交流拠点」としてしっかりと役割を果たせるように力を尽くす所存であります。

現在、大学院の在校生は約750人を数えますが、1000人規模への拡大をめざしております。また卒業生も昨年3月で通算3000人を突破しました。昨年8月に私が会長を務めました第8回医療福祉大学学会学術大会では、多くの卒業生の絆を強めていただこうと、ホームカミングの催しを兼ねて新設の東京赤坂キャンパスにて開催いたしました。お陰様で大勢の皆様に参加いただき交流を深めていただけたと大変嬉しく思います。有り難うございました。

本年はいよいよ平成から新しい時代へと始動します。この新しい時代において我が国は知識基盤社会を形成して発展することが求められており、高等教育とくに大学・大学院教育の重要性が更に高まり、本学の果たすべき役割は益々大きくなると自負しております。そしてこのような時代だからこそ、我々は先進的な医療の旗手として活動すると共に、国民の信頼を得てしっかりと「共に生きる社会」の実現をめざすべきと考えます。

本年も皆様のご指導・協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

最優秀賞に近常綾香さん 第9回高校生作文コンテスト

第9回「共に生きる社会」めざして高校生作文コンテスト(主催:国際医療福祉大学、毎日新聞社、後援:文部科学省、全国高等学校長協会)の表彰式が12月1日、東京赤坂キャンパスで開かれた。「医療と福祉、わたしの体験」「未来のための今を生きる」「多様性を認め合う社会をめざして」の3つのテーマに全国から、過去2番目に多い2137点の作品が寄せられた。



●表彰式に出席された受賞者の皆さん

厳正な審査の結果、最優秀賞の長野県・佐久長聖高等学校2年、近常綾香さんの「私たちがもった大切な言葉」をはじめとする個人賞および学校賞に大友邦学長から表彰状などが贈られた。審査委員を代表して、冠木雅夫公益財団法人認知症予防財団常務理事が「優秀な作品ばかりで審査にとっても苦労した。上位の作品に共通して大きな意味を持ったのは言葉だった。周囲の無理解な言葉に対し、どうやって自分自身の言葉を見つけ、自分を守る武器にできるかがつづられている」と講評した。

表彰式後には個人賞受賞者らが作品を朗読した。最優秀賞の近常さんの作品は、障害のため幼稚園でお母さんに導尿をしてもらっているのを奇異の目で質問をする子に対し、別の男の子が「何も変わったことじゃないんだよ」と論じてくれたことに對して「彼にとっては普通の会話だったかもしれないが、私にとっては忘れられない言葉だ」と、障害を特別視しないことに感謝。「彼のように考えれば『共に生きる社会』はみんなで作っていくことができる」としている。

表彰式に先立ち、本学の赤津晴子医学部医学教育統括センター長、高橋泰赤坂心理・医療福祉マネジメント学部長と、コディネーターの元村有希子毎日新聞社科学環境部長との鼎談方式による特別講演会「明日の医療福祉を創る人へ」が行われ、未来の医療福祉について活発な議論が交わされた。

その他の受賞者は次の通り。

【優秀賞】
埼玉県立宮代特別支援学校高等部3年、須藤優斗さん／神奈川県・横浜市立ろう特別支援学校高等部3年、常盤りおさん

【佳作】
静岡県立韮山高等学校1年、清家牙さん／東京都・女子学院高等学校1年、吉本美歩さん

【学校賞】
青森県立八戸高等学校／茨城県・江戸川学園取手高等学校／栃木県・宇都宮文星女子高等学校／千葉県・日出学園高等学校／東京都立国際高等学校／佐賀県・佐賀清和高等学校／沖縄県立名護高等学校

(広報部)

成田キャンパスで 国際交流親善パーティー開催

本学をご支援いただいている千葉県成田市、成田市国際交流協会や地域の方々と本学の留学生、外国人数員などが一堂に会して親睦を深める2018年度国際交流親善パーティーが12月14日、成田キャンパスで開かれた。小泉一成市長をはじめとする来賓の方々、留学生、外国人数員など約110人が出席し、大いに盛り上がった。



●留学生に囲まれる小泉市長



●始まりの挨拶に立つ大友学長

今春成田キャンパスにオープンした「レストランオーブ」に響き渡る学生の太鼓サークル「成太鼓」の力強い演奏で始まった。大友邦学長の挨拶に続き、小泉市長、成田市国際交流協会の品田等理事長のご挨拶の後、松谷有希雄副学長の乾杯の発声

で懇親が始まった。

外国人教員紹介では、外国人教員が登壇し、医学教育統括センターの西村渉副センター長が挨拶。成田キャンパスでは外国人教員数が昨年と比べて大幅に増加し、現在約30人の専任外国人教員が着任し、家族とともに成田市に住んでいる教員もいて地元の皆様にお世話になっていることなどが紹介された。



●日本語で挨拶する別科生

留学生紹介では、学科ごとに留学生と教員が登壇し、留学生代表が、学科の様子や学科所属の留学生を紹介した。昨秋来日したばかりの留学生別の科のモンゴルの学生はモンゴルの伝統的な衣装に身をつつみ、日本語で丁寧な挨拶し、会場から驚きの声が上がった。

パーティーの終盤には、留学生全員で中島みゆきの『糸』を歌っ



●中島みゆきの『糸』を合唱する留学生

新春のごあいさつ

高木邦格理事長／大友邦学長／三浦総一郎大学院長

トピックス

第9回高校生作文コンテスト

成田キャンパスで国際交流親善パーティー開催
本学を含むコンソーシアムがIAEAと協定締結

キャンパスレポート

大田原 第15回学生&企業研究発表会／ボランティア団体、地域の安全活動で表彰／大田原マラソンを応援／第14回JRRPS関東甲信越ブロックリーダー研修会

成田 成田国際高校生と留学生が成田山新勝寺を散策／留学生が日本の正月遊びと餅つきを体験／応急手当普及員講習を実施

小田原 ミニオーブンキャンパス／市民公開講座開催／小田原市と代表者懇談会を開催／運動会／第20回城下町おだわらツリーマーチ

東京赤坂 MIAATOシティアラソンにボランティア参加／がんプロフェッショナル養成教育ワークショップ開く／初めてのクリスマス・チャリティバザー

福岡 第1回市民公開講座／第2回市民公開講座／ナッシングキャリアカフェ／学友会球技大会

大川 海外研修成果報告会／同窓会九州支部会総会／地域公開講座／平成30年度動物慰霊祭

施設インフォメーション 新年のごあいさつ

国際医療福祉大学病院／塩谷病院／市川病院／三田病院／熱海病院／国際医療福祉リハビリテーションセンター／新宿けやき園／山王病院／高木病院

施設インフォメーション トピックス

国際医療福祉大学病院／塩谷病院／三田病院／熱海病院／山王病院／塩谷看護専門学校

海外保健福祉事情

韓国／中国／台湾／インドネシア／シンガポール／オーストラリア／モンゴル／イギリス／ベトナム／フィリピン／ミャンマー／ラオス

留学生トピックス

秋の遠足

学位記授与式、入学式日程

キャンパスブラスー クラブ・サークル紹介
国際Suntowers(小田原キャンパス)

本学を含むコンソーシアムが IAEAと協定締結

本学を含む大学・研究機関・医療機関11施設からなるコンソーシアムと国際原子力機関(IAEA、本部Ⅱオーストリア・ウィーン)は11月29日、核医学分野に関する協定を締結した。

協定の主な内容は①核医学の専門家のトレーニングにかかる協力②臨床核医学および関連研究に関する会合およびワークショップ開催における協力③核医学における大学からIAEAおよび加盟国への技術指導の提供④関係する情報や成果の共有など。

国際連合傘下の機関であるIAEAは、原子力の平和利用を行う国際的な組織で、天野之弥事務局長のもと医療分野での利用が推進されている。協定締結前日の28日にIAEA本部で原子力科学技術閣僚会議が開催され、日本政府代表の辻清人外務大臣政務官が演説し、原子力科学技術が医療などの様々な分野で活用されていることに触れ、「持続可能な開発目標(SDGs)の促進に向けて、今後一層活用されることを期待する」と述べるとともに、日本の具体的協力事業として核医学分野における途上国の人材育成に関わる連携を強化する考えを示した。

コンソーシアムは本学のほか、以下の大学・研究機関・医療機関で構成されている。

大阪大学大学院医学系研究科／藤田医科大学医学部／北海道大学大学院医学研究科／金沢大学医薬保健学域／京都大学医学部附属病院／国立がん研究センター／国立精神・神経医療研究センター／総合南東北病院／東北大学大学院医学系研究科／東京医科歯科大学

第116回 大田原 キャンパスレポート

第15回学生&企業研究発表会 薬学部学生 最優秀賞受賞

第15回学生&企業研究発表会(主催:大学コンソーシアムとちぎ)が12月1日、帝京大学宇都宮キャンパスで開催され、本学薬学部薬学科の佐古菜さん他3人のグループが「脳内ATP感受性カリウムチャネルが情動行動に及ぼす影響」のテーマで最優秀賞(知事賞)を受賞した。この会で本学のグループが最優秀賞を受賞したのは2008年以来2度目である。

会では、県内の大学や企業のグループが「地域社会活性化」「環境エネルギー」「ものづくり」「医学・医療・福祉」の4分野で研究成果を発表した。

本学からは、「医学・医療・福祉」分野に薬学科の4グループ(佐古さんのグループ以外は根本雅也さん他3人/原綾佑さん他1人/古谷彩乃さん他4人)と、保健医療学部視機能療法学科の1グループ(矢島彩奈さん他5人)、「ものづくり」分野には薬学科から1グループ(新藤隆浩さん他4人)ノポスター発表には視機能療法学科から1グループ(竹澤優子さん他5人)が参加した。



●表彰状を授与された受賞学生と指導教員

最優秀賞以外でも、本学グループが協賛企業などの特別表彰(タスク賞、フレンド賞)を受賞した。(総務課 鶴見龍太郎)

ボランティア団体、地域の安全活動で表彰

本学の学生サークルによる地域での高齢者見守り活動が認められ、2団体が相次いで防犯功労賞を受賞した。

「黒羽盛り上げ隊」は「第43回地域安全県民のつどい」で栃木県警察本部長、公益社団法人栃木県防犯協会から表彰された。また、「あべさんち」は「地域安全のつどい」で大田原警察署、大田原市防犯協会から表彰を受けた。

どちらの団体も茶話会活動を通して大田原市黒羽地区、佐久山地区にお住いの高齢者の皆さんとの繋がりを深め信頼関係が築けたことにより、今回の受賞に繋がったものである。

これからも、学生と地域の繋がりを大切にした活動を心掛けながら学生の皆さんが気持ちよくボランティア活動ができるようコーディネートをしていきたい。

(IUHWボランティアセンター ボランティアコーディネーター 福田規予子)



●黒羽盛り上げ隊部員のメンバー

大田原マラソンを応援

医療福祉・マネジメント学科の1年生全員が、11月23日に開催された「第31回大田原マラソン」の応援に参加した。学生の応援は今年で5年目になる。大学前が35キロ地点となっており、130人の学生が沿道に1列に立ち並んで声援を送った。



●ランナーに熱い声援を送る学生たち

初めのうちは、寒風に煽られて縮こまり、なかなか大きな声で応援することができない学生たちだったが、ランナーたちの一生懸命な姿に自然と声が出るようになった。いつせいに小旗を振って熱い声援を送り、ハイタッチで駆け抜けるランナーと盛り上がり、苦しそうに歩き出したランナーに励ましの声を送っていた。

また、マラソン当日は寒いながらも快晴で、キャンパス内関連施設の利用者22人も応援に参加され、学生もそのサポートをさせていただいた。利用者の皆さんも笑顔で応援小旗を振っておられた。マラソン終了後、学生からは、「ランナーが必死で走る姿を見て、自分も頑張ろうと思った」との声が聞かれ、よい刺激となった1日だったようだ。

(医療福祉・マネジメント学科 教授 加藤尚子)



●日本風情たっぷりの参道を歩く



●初めての餅つきを体験する留学生

打ち解けて話せるようになると、覚えたての漢字を看板の中に見つけて一緒に読んでいたり、母国と違う日本の高校生の生活を紹介してもらったりするなど、お互いの文化を学ぶ有意義な経験になった。短い時間での交流だったが、最後は名残惜しそうにしている姿も見られた。

(国際交流センター 金光美貴子)

留学生が日本の正月遊びと餅つきを体験

国際交流センターでは定期的にランチ会を開催している。昨年最後となった12月11日は、福笑い、カルタ、けん玉、おはじき、お手玉を用意して、昼食を手に集まった留学生や外国人教員に日本の正月の遊びを体験してもらった。初めて目にするけん玉は、持ち方や遊び方を



●初めての福笑いも上々の出来栄え



●つきたての餅を学生たちに配る

とのある学生が少ないなか、留学生たちはおそろしく初めて見る臼と杵に戸惑いながらも積極的に参加して、日本の師走の伝統的なイベントを楽しんだ。小春日和のもと、つきあがった餅はすぐに調理台に運ばれて、「あんこ」と「きな粉」をまよって参加者のお腹におさめた。

(国際交流センター 大西信行・七島寛子)

応急手当普及員講習を実施

12月8〜9日、本学にて応急手当普及員講習を実施し、すでに上級救命講習を履修した学生40人、教員2人が参加した。この講習の目的は市民を対象として開催される救命講習会での指導担当者(応急手当普及員)の養成である。



●評価者が見つめるなか、指導技法を習得する参加者



●認定証を手記に記念撮影

2日間にわたる実技と講義を繰り返した結果、見事に全員が修了し、成田市消防から認定証が交付された。これにより、本学の修了者42人は、今後、普通救命講習や救命入門コースで、受講者への指導を担当することになる。

昨年度とあわせると成田キャンパスには90人を超える普及員が誕生しており、来春4月に医学部新1年生を対象とした「ウェルカムBLS」での活躍が期待される。

(成田コミュニケーションセンター 教授 石川和信)

第48回 小田原

キャンパスレポート

ミニオープンキャンパス(三田病院)

小田原保健医療学部ミニオープンキャンパスを10月27日、国際医療福祉大学三田病院で開催した。

オープニングでは宮崎勝副学長より、ご挨拶と三田病院の概要説明が行われ、その後は荒木田美香子副学部長による「大学紹介」、各学科の教員による「学科紹介」、三田病院に勤務する小田原保健医療学部卒業生からの「仕事内容や受験生への報告やアドバイス」「病院見学」など、キャンパスでは行えない特別なプログラムを実施した。



●宮崎副学長による三田病院の説明



●個別相談ブースにて

参加した高校生からは「今までのオープンキャンパスでは聞けなかった話を聞けてとても充実した内容だった」「他学科の特徴も聞け、学べきものを感じた」「実際の病院の内部まで見ることができ、スタッフの雰囲気もとても良かった」「病院特有のにおいがなく、施設がとても綺麗だった」などの感想をいただいた。終了時刻ギリギリまで個別相談ブースには多くの高校生が訪れ、受験対策などの話に熱心に耳を傾けていた。

(学務課 石黒俊次)

「市民公開講座」開催

毎年恒例の「市民公開講座」を10月28日に開催した。地域の方々に自身の健康について見つける機会として大学の知見に触れていただける講演や体験(測定)型の講座に自由に参加できる形ですっかり根付いた行事となっている。



●学生と一緒にアロマ体験

今年度は「守ろう健康 育てよう心と身体」をテーマに「健康長寿」や「良い病院の見分け方」「心の健康」についての講演のほか、「血管年齢測定」「脳機能測定」「転倒リスク測定」など測定・体験型のコーナーでさまざまな角度からそれぞれの健康について確認し、学んでいただいた。例年参加されている方も多く、「引き続き毎年開催してほしい」「とても役に立った」等のご意見をいただいた。今後も地域の皆様に「開かれた大学」として多くの情報発信をし、地域への貢献を果たすべく継続して取り組んでいく。

(学務課 稲葉博之)

小田原保健医療学部と

小田原市の代表者懇談会を開催

平成30年度の小田原市と本学の代表者懇談会が11月2日、開催された。同市からは加藤憲市長、時田光章副市長を含め10人、本学からは大友邦学長、松谷有希雄副学長、佐藤哲夫熱海病院長と黒澤和生学部長を含め12人が出席した。

冒頭、加藤市長は挨拶で、本学の医療人材

第3回 東京赤坂

キャンパスレポート

心理学科と大学院臨床心理学専攻の交流会を開催

赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科の学生と大学院医療福祉学研究所臨床心理学専攻の院生との交流会が11月7日、東京赤坂キャンパスで開かれた。会では院生1人に対し、学部生数人ずつの班に分かれ、さまざまな話し合いを行った。

私に加わった班では、薬剤師として抗うつ薬の開発に従事してから大学院に進学された方が、自らの経歴や、改めて心理職をめざしたきっかけなどについてお話をしてくださった。



●活発な意見交換が行われた

また、私たちが知りたかった資格や進路についての質問にも丁寧に回答していただいた。自分たちの進路について具体的な想像がしにくい1期生の私たちにとって、先輩方のお話があるこのような機会はとても貴重であり、身の引き締まる思いだった。院生の方が学んでいる内容についても伺うことができ、公認心理師をめざす私たちには刺激の多い交流会となった。

(心理学科1年 鈴木結実菜)

MINATOシティマラソンにボランティア参加

東京都港区の芝公園周辺をスタート、フィニッシュ地点として12月2日に行われた「MINATOシティハーフマラソン2018」に給水ボランティアとして参加した。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて雰囲気を盛り上げるなどの目的で港区等が主催して開催した第1回ハーフマラソン。とても寒い朝の早い時間からの活動だったが、1つの大会を大勢の人と協力して作り上げる楽しさを味わうことができた。



●給水所での様子

5千人以上のランナーに水とスポーツドリンクを渡すのはとても工夫が必要な作業で、例えばコップを置く位置や量、飲み物を注ぐ速さなど、走ってきたランナーに合わせる事が重要だ。特に印象に残ったのは、大勢のボランティアの中でも積極的に行動する人としらない人に大きく分かれていることだった。

ボランティアは自主性が問われるものなので、自分から行動しないと置いていかれるということを目の当たりにした。これからもこのような機会があれば参加していきたい。

(医療マネジメント学科1年 石井杏奈、市川佑香)

育成に対する期待を表明し、駅前の再開発について説明した。大友学長は本学部の現状について説明し、就職の面でも市に貢献していきたい旨を述べた。

市への要望事項では、教育課程や市民公開講座および開放授業への協力要望等について快諾され、引き続き市と大学が相互協力することを確認した。また、市からは市立病院での実習状況や病院への職員募集などの説明があり、生涯現役促進地域連携事業と連携したシニアの健康に関する取り組みへの依頼をいただいた。将来に向けて、小田原市と本学との積極的な連携を確認する良い機会となった。

(総務課・学務課 小柳津恵)

運動会

雨の天気予報から一転、すばらしい晴天に恵まれた11月17日、本年度から「スポーツ大会」を「運動会」に名称変更した第13回運動会が開催された。



●最終種目学科別リレー

本年度も会場を、体育館とグラウンドに分け、体育館ではバスケットボール「バレーボール」、グラウンドでは「ドッジボール」「サッカー(男子)」と2カ所で行った。最後はグラウンドを会場として、「借り物競争」を行った後、最終種目「学科対抗リレー」で締めくくった。実行委員長の看護学科2年、八木伊吹君を中心とする実行委員が繰り返し事前打合せを実施し、天気状況に合わせたプログラムを作成、動線やスケジュールを詳細に計画

がんプロフェッショナル養成の教育ワークショップ開く

大学院は12月9日、東京赤坂キャンパスで「がん薬物療法・放射線治療の最新の展望」をテーマに、がんプロフェッショナル養成のための教育ワークショップを開催した。文部科学省の「多様な新ニーズに対応する『がん専門医療人材』ががんプロフェッショナル」養成プラン」に採択された「未来がん医療プロフェッショナル養成プラン」に基づくもの。



●総括講演する日本医科大学の弦間昭彦学長

菅野康吉栃木県立がんセンターゲノムセンターがん予防・遺伝カウンセリング科ゲノムセンター長と、弘前大学大学院医学研究科放射線腫瘍学講座の青木昌彦教授ら各界のスペシャリストから講演をいただいた。これを受けて、日本医科大学の弦間昭彦学長が「新テクノロジー時代の医療と肺がん診療」について総括講演された。また、教育効果の反応を確認する試みとして、アンサーパッドを使い能動的なワークショップを展開し、盛会のうちに終了した。

なお、本プランでは、2019年度も大学院課程で、「ライフステージに対応したがんプロフェッショナル多職種協働人材育成コース」と「ゲノム解析医療・希少がん診療に精通した医療者育成コース」の履修生を募集する。ぜひ受講いただきたい。

(事務部 鈴木亨)

第20回城下町 おだわらツデーマーチ

11月17、18両日開催された「第20回城下町おだわらツデーマーチ」(主催:小田原市等)に理学療法学科の学生がボランティアとして参加した。

本イベントは小田原のみならず、真鶴・湯河原コース、箱根コースに分かれており、歴史的情緒あふれる街並みをウォーキングするプログラムだ。



●ストレッチを施す理学療法学科の学生

ウォーキングから帰って来た参加者やイベントに出展している企業の方に、学生がストレッチ指導を行い、喜びの声が多く聞かれた。中には「毎年お願いしています」と嬉しい言葉もあった。

学生にとって臨床実習以外に地域の方と触れ合う機会は少なく、参加者の方とのコミニケーションを楽しんだ。また、臨床実習を想定して痛みや既往の有無などを聴取するよい機会となり、有益な時間となった。

(理学療法学科助教 右田正澄)

初めてのクリスマス・チャリティバザー

街が華やかなイルミネーションで彩られた年末の12月21日、東京赤坂キャンパスで、初めてのクリスマス・チャリティバザーが開催された。バザー当日に向け、留学生を含む学生ボランティアが会場となる国際交流センターの飾り付けを行い、雰囲気づくりを演出した。



●チャリティバザー会場の様子

当日は開場2時間前に最初のお客様が到着。開場とともに列をついていた地域の方を含め多くの来場者で賑わい、お昼すぎには用意した品物の半分が売れていた。午後からは教職員も立ち寄り、キャンパス内だけでなく、当グループ関連病院・施設の職員からも届けられた数百点にのぼる品物を、終了時までにはほとんど購入いただいた。多くの学生ボランティアが来場者の対応で大活躍した。

また、学生サークルによる手話歌、栗田康生准教授のピアノコンサート、「赤坂氷川祭」写真展も同時に開催され、チャリティバザーを盛り上げた。地域の方とともに年末の楽しいひとときを過ごすことができた。収益金は被災者支援・医療支援団体等に寄附する。

(国際交流センター 長谷川さち子)

第39回

福岡

キャンパスレポート

第1回市民公開講座

福岡看護学部は、本年度開設10年目を迎えて10月13日、開設後初めての市民向け公開講座を開催した。

「妊娠期からの子育て～女性脳から母性脳への変換」をテーマに、母性看護学・大学院助産学分野教授の佐藤香代が担当した。妊婦教室から得た体験をベースに、今女性のからだに何が起きているかを解説し、育児を愉しみ幸せな母子の絆をつくる秘訣を語った。参加者は110人で、成功裏に終わった。

当日、多くの子育て中の母親と子どもが参加したため、会場の後ろにマットを敷きキッズコーナーを設けた。教員が子どもの面倒をみることで、母親たちは安心して講演に耳を傾けることができ、複数の母親が「子ども連れて参加でき、スタッフの皆さまの温かい対応に感銘を受けた」と記していた。また「将来娘に赤ちゃんができたなら、丸ごと受け止めた」「若い方に早い機会に伝えたい大切な授業」「温かく優しい気持ちになった」と述べられていた。さらに演習での気功は、「すごく心地よかった。今までの自分をありのまま受け入れられた」と全てに満足度が高かった。会場は、今年大学院で行った「世にも珍しいマザークラス」の雰囲気を感じてもらえるよう、助産学生手作りの折り紙や絵で装飾した。母子



●講演を行う佐藤教授

に優しい公開講座になったと思う。今後とも二丁目に沿った公開講座を開催し、市民に愛される学部をめざしていきたい。

(看護学科教授 佐藤香代)

第2回市民公開講座

第2回市民公開講座は、「あそびから学ぶ子育て 育児は育自」子どもも育ち、自分も育つ」で実施した。京都大学総長山極寿一氏によると、人類の祖先が700万年前の言葉のない時代に獲得した道具を使用し仲間と共有、さらに言葉が生まれたことで人類は共通の物語を生きてきたと述べている。時代の子育ても新生児期には様々な生活環境の中から基本的な生活習慣で道具使用を獲得し、更には言葉を獲得することで、子どもが大きく成長している。その基本的な生活の中にあそびが存在し、その中から自発的で自由な活動を行い自分の心身能力を無意識のうちに発達させている。その環境を整え子どもの成長過程を見守る親も当然育つていく過程でもある。



●読み聞かせに聞き入る子どもたち

今回は、子どもの発達理論から運動機能を促すあそび、記憶・認識・思考・想像力を促す絵本読み、集団遊びでは基本的信頼関係から社会性の成長と3つの遊びで親子がともに共感できる遊びを体験してもらった。多くの子どもも参加で、安全には十分配慮、学生も参加することで知識と子どもの実態を体験し、多くの学びを感じていた。参加者・公開講座担当者とも充実した時間であった。

(看護学科特任准教授 上野恭子)

ナースینگキャリアカフェ

ケアリング・テイランド九州沖縄コンソーシアムの一環とし、12月8日にナースینگキャリアカフェを開催した。

今回は「救急医療の最前線から」のテーマで救命救急認定看護師であり、フライトナースとして活躍されている今泉詩織氏よりご講演いただいた。参加者は本学の学生をはじめ、周辺の他大学からも学生が参加した。

講演では、救急の現場に必要な迅速な判断力やフィジカルアセスメント、応用能力について資料を用い、わかりやすく解説していただいた。特に実際にドクターヘリの内部の設備やフライトナースの搭乗時の役割についての説明では、真剣な眼差しで話を傾けていた。

会場にはフライトナースが搭乗の際に着用するスーツや、現場に持参する救急バッグの展示を行い、実際に手に触れ、説明を聞いたことで現場の雰囲気を感じることができた。



●真剣に講演を聞く学生たち

終始和やかな雰囲気、憧れのフライトスーツを着用し記念撮影をする学生や、フライトナースになるために必要な知識や技術など熱心に質問をする学生が見られた。

今回の企画は学生からの要望を元に開催したもので、「実際の話を聞いてかっこいいと思った」「講義では聞けないことを知ることができた」など有意義な時間となった。

今後も学生が医療専門職者としてのキャリアアップを図れるような企画を設けていきたい。

(看護学科助教 森雄太)

学友会球技大会

学友会主催の球技大会を12月8日に開催し、1、2年生約50人が参加した。競技種目はバスケットボール、バレーボール、ハンドボールで、学年に関係なくまた全員が楽しめるように各競技の経験者の人数を考慮したチームを編成し、学年を越えた学生間の親睦を図ることを目的に開催した。

競技中は、円陣を組むチームや一丸となって声援を送るチームなど、チームごとに力を合わせて全力でプレーし、非常に熱く賑やかな大会となった。3種目とも白熱した試合が繰り広げられ、最終競技であったバレーボールの決勝戦では最高潮の盛り上がりを見せた。

普段の学校生活で接することの少ない他学年の学生と触れ合い競い合ったことは、授業や実習に忙しい学生にとって良い気分転換の機会になったと思う。また同じ学部で学ぶ者同士の絆も深まったようだ。

学友会での準備や運営の中で戸惑う様子も見られたが、それもまた学友会メンバーにとって良い経験となったのではないだろうか。今後も学友会の恒例行事としてこの球技大会が継続的に開催されることを願っている。

(教務係 田原佑美)



●バレーボールに盛り上がる学生たち

第53回

大川

キャンパスレポート

海外研修成果報告会

平成30年度海外研修の成果報告会が9月19日、大川キャンパス講堂で開催された。今年度の大川キャンパスの海外研修は、新たにシンガポール工科大学、モンゴル国立医療科学大学が渡航先として加わり、15の研修国、20の研修先に257人の学生が参加して実施された。

報告会は海外研修に参加した学生に加えて1年生が全員参加した。研修班ごとにその成果をパワーポイントを使用して発表し、引率教員が補足説明をするという形で行われた。日本では決して触れることのできない現地医療の実情や異文化交流の生き生きとした様子が報告され、世界各地から持ち帰った学びが共有された。



●緊張しながら発表する学生たち

次年度に研修を控える1年生にとつては、研修先を選択するための情報収集の場ともなり、有意義な報告会となった。

(国際係 杉原活郎)

同窓会九州支部会総会

平成30年度同窓会九州支部会総会が10月27日、大川キャンパスで開催された。

今年度は九州支部設立10年目を迎え、記念イベントとして外須美夫副学長による記念講演、各分科会研修会、全分科会合同による懇親会など、例年より規模を拡大して行われた。参加者は全体で160人を超え大変な盛会となった。

外副学長による記念講演では、「21世紀のチーム医療」をテーマに、人工知能(AI)やロボットの医療分野への進出とそのあり方を含め、貴重なお話を聴講できた。



●恩師と再会し記念撮影

また、分科会では、学科ごとの専門分野に分かれ、教員による特別講演や症例検討会、各期の臨床に留まらない現状報告会が行われた。どの会も趣向を凝らし、参加者からは「有意義な時間を過ごすことができた」との声が聞かれた。

最後に行われた合同懇親会では、九州支部イメージキャラクターのアイユーくんとアイユーちゃんがお祝いに駆けつけ会場を盛り上げるなか、学科や卒業年次、キャンパスを越えた交流が繰り広げられ、教員も含め学生時代の思い出話などに花が咲いた。

今回の総会は卒業生が同じ医療専門職の仲間として改めて繋がりを深めることができた大変有意義な機会となった。この繋がりが、これからも広がり続けることを期待している。

(学生係 野田仁美)

地域公開講座

平成30年度地域公開講座が11月10日、大川キャンパス2号館209教室で開催された。今年度の講演テーマは、「今日から始めよう!」言語聴覚士が提案する健康長寿生活」と題し、座長に言語聴覚学科長・為数哲司教授、講師は言語聴覚学科講師・岩崎裕子先生が担当された。

大川市の後援を受けて開催された本講座では、事前配布されたお茶を使用し、一定時間内に何回嚥下できるかを計測し、喉嚥下力高める体操として、嚥下おてこ体操を紹介し、参加者全員で行うなど、実践を交えながらの講演となり、終了後の質疑応答も活発に行われた。

地域交流の一環として開催されている本講座は今回で11回目となるが、今後も地域に開かれた大学の体現のため地域に貢献できる行事を行っていきたいと思う。

(学生係 松永稔史)

平成30年度動物慰霊祭

平成30年度動物慰霊祭が12月11日、実施された。

動物慰霊祭は、教職員・学生が一同に集い、教育や研究のため犠牲になった動物の御霊に弔意を捧げると同時に、深い感謝の気持ちを表し、改めて動物たちに対する道義的、倫理的な扱いの推進を誓うために行う。

本学では、理学療法学科と作業療法学科

の1年生の授業で動物実験を行っている。また、研究活動においても、マウスやラットなどの動物たちの尊い犠牲により貴重な研究成果が得られている現実がある。

今回の式典には、約150人の学生・教職員が参列した。工藤祥福岡保健医療学部長の挨拶に続き、九州地区動物実験委員長の小坂克子教授(医学検査学科)が慰霊の言葉述べた。

小坂委員長は「動物たちの尊い命は、学生の実習で教育に大きな貢献をしました。また研究対象となった尊い命の犠牲により貴重な研究成果が得られ、学術論文や学会での発表がなされました。近年、生命科学は目覚ましい発展を遂げていますが、その成果の多くは動物実験に依存したものであり、動物実験による恩恵は、広く人類の福祉に貢献しているものであり、実験動物たちの犠牲のうえに人類の生存と繁栄があることを忘れることはできません。研究・教育のために犠牲になられた多くの実験動物に対し、ここに謹んで感謝と敬意を表し、私たちの健康や福祉が動物たちの命のうえに成り立っている事実を再認識して教育・研究に従事していくことを誓い、慰霊のことばと致します」と述べた。



●多くの学生・教職員が参列した

この後、参列者一同、教育・研究のために尊い命を捧げてくれた動物たちに思いを馳せ、哀悼の意を込めて黙祷した。

今回は動物慰霊祭のみが執り行われたが、本学ではこれとは別に適正な動物実験のあり方を学ぶため、教育訓練も実施している。

(入試学生募集課 井上雅博)

附属病院

国際医療福祉大学病院

病院長 大和田 倫孝



山形大学卒、医学博士。前自治医科大学産婦人科准教授、日本婦人科腫瘍学会認定指導医、婦人科腫瘍専門医、日本産科婦人科学会認定産婦人科専門医、日本臨床細胞学会認定細胞専門医、日本がん治療認定医機構がん治療専門医。

明けましておめでとございます。平成31（2019）年、平成最後の年を迎え、5月からは新しい年号に変わることになり、平成という時代をなつかしく感じながら振り返っている方も多いと思います。さて、当院は今年2月より、昨年増築された新病棟を使用し、いよいよ353床から408床の病院として稼働します。患者様にとって、さらなる貢献ができるものと確信しております。

また、400床を超えたことは、特定機能病院をめざす当院にとって条件のひとつである病床数をクリアしたことになります。病診連携の点では、近隣の診療所や病院と良好な関係が築かれており、昨年は紹介患者数が月平均1千件、紹介率が65%に達しております。

今後さらに紹介数を増やすことは、2020年4月から開始する医学生の実習にも不可欠です。本学医学部1期生の臨床実習では、当院が中心的な役割を担いますので、診療、教育および研究面でのさらなる充実が求められます。今年も職員が一丸となつて、診療、教育、臨床研究のより一層の発展に努めてまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学塩谷病院

病院長 須田 康文



慶應義塾大学卒、医学博士。国際医療福祉大学三田病院整形外科部長、慶應義塾大学病院整形外科診療科副部長を歴任。日本整形外科学会認定整形外科専門医。

当院は、塩谷医療圏を中心とする地域の方々の健康を守る基幹病院の役割を担い、日々医療の充実に努めております。

一昨年、栃木県より地域災害拠点病院ならびに災害派遣医療チーム（DMAT）指定病院に指定されており、それに伴い、災害発生時に傷病者の緊急医療支援を行うよう、インフラ整備を行うとともに、院内において訓練を実施しています。

昨年2月には昨今のニーズに対応し、回復期リハビリテーション病棟の病床数を46床に増やし、受け入れ体制を整えました。また、行政と情報交換し、地域医療への貢献を充実するため、初めての「矢板市・国際医療福祉大学代表者連絡会議」を開催し、矢板市との協力体制を構築いたしました。

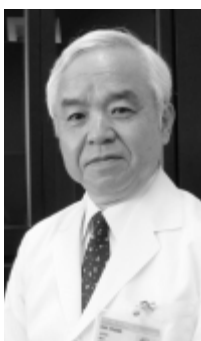
本年はさらなるチームワーク向上と全スタッフがより一層のレベルアップを図り、良質な医療をご提供していけるよう取り組んでまいります。

本年もご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学熱海病院

病院長 佐藤 哲夫



東京慈恵会医科大学卒、医学博士。前国際医療福祉大学三田病院副病院長、元東京慈恵会医科大学助教授。日本呼吸器学会指導医。

新年おめでとございます。当院は伊豆半島東側の付け根に位置し、眼前には相模湾が広がる風光明媚の地にあります。

熱海市の人口は、2018年現在3万7225人で、前年に比べ微減、高齢化率は46.3%に達しています。市民の平均年齢は56.0歳（男53.5歳、女58.1歳）で、人口の半数が60歳以上です。その中で病床数269床（一般234床、感染4床、回復期31床）を擁し、応需率90%以上を維持する救急体制、熱海のお産の多くを受け入れ、小児科も365日24時間体制で診療するなど、熱海市全体、伊豆半島の東側から湯河原までの医療を担っております。これもひとえに職員全員の熱意と努力があつてこそ可能なことであります。

昨年は、3テスラのMRI、320列のCTなど最新の機器が導入され、順調に稼働しております。また、今年4月には、当グループ最多である10人の初期研修医が入職する予定です。

まだまだ課題が山積しておりますが、今年もさまざまな事例に真摯に取り組んでまいります。さらなるご支援ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

国際医療福祉大学リハビリテーションセンター

センター長 下泉 秀夫



徳島大学卒、医学博士。元栃木県身体障害医療福祉センター医務科長。国際医療福祉大学大学院教授。

社会福祉法人邦友会が運営する当センターは、心身の障害や発達障害等における地域の療育の中核である「なす療育園」と、身体に障害を持つ方を対象とした施設入所支援と日中活動サービスを提供する「サポートハウス那須」との複合施設です。「なす療育園」では、隣接する児童心理治療施設「那須こどもの家」の児童の発達や心理治療への支援、幼保連携型認定こども園「金丸こども園」の園児健診や、病児保育のバックアップの役割も担っています。

昨年からは新たに栃木県の医療的ケア児等に対する支援事業に協力し、セミナーの開催やコーディネーター養成の取り組みも行っています。

邦友会では、特別養護老人ホーム「栃の実荘」が本年4月に新築増床し、リニューアルオープン予定です。地域の保健・福祉・教育機関と連携して質の高いサービスをご提供するよう努めてまいります。本年もご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学市川病院

病院長 佐伯 直勝



千葉大学卒、医学博士。千葉大学名誉教授、前千葉大学脳神経科学教授。日本脳神経外科学会専門医、日本神経学会専門医。

昨年度、本学5番目の附属病院としてスタートした当院は、神経内科・腎臓内科等を新設し、診療、研究分野で地域の重要な責務を負っています。また、成田キャンパスと同じ千葉県にあり、最も近い附属病院として教育的役割が期待されています。昨年は、実習生をグループ内外から3240人受け入れました。今後は、医師も含めた医療従事者を養成する教育認定施設として、さらに発展することが使命となります。

また、地域貢献活動として開催する講演会に加え、近隣医師とより緊密な交流を図る目的で、医療連携症例報告会の実施、医師会行事への参加を積極的に行っています。その結果、外来患者数が増加を続ける成果を挙げられています。スタッフ、施設、機器の充実など課題は山積していますが、一つひとつ解決していく必要があります。まずは、麻酔科、救急分野の拡充を予定しています。

昨今、働き方改革など医療環境は厳しくなっていますが、一人ひとりの患者さんとして向き合い、最良の医療をご提供する職責には変わりありません。

本年もご支援ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

新宿けやき園施設

施設長 中谷 肇一



東京農工大学卒。前東京都福祉保健局健康安全部長。

当園は、ユニット型の特別養護老人ホーム短期入所、障害者の入所支援・生活介護など、高齢者と障害者のための多機能施設です。

昨年は、栄養部門において、食事提供のきめ細かい配慮や徹底した衛生管理等が高く評価され、東京都知事賞を受けました。介護施設の経営は慢性的な人材不足等により、大変きびしい状況が続いています。その中で、当園では職員一同の奮闘により、よりよい運営をめざしています。

今年も、喫緊の課題である人材確保をはじめ、創意工夫を凝らした業務改善に取り組む、地域の皆様に信頼される施設となりますよう、サービス向上に努めてまいります。

引き続き、皆様方の温かいご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学三田病院

病院長 宮崎 勝



千葉大学卒、医学博士。千葉大学大学院教授、同大学医学部附属病院長、同大学副学長、第112回日本外科学会会長、日本肝胆膵外科学会理事長を歴任。本学副学長。

当院は東京都の「二次救急指定病院」および「がん診療連携病院」として、高度急性医療を広域の患者様にご提供しています。2018年はベッド数291床に対し、常勤医149人、看護師290人、薬剤師32人、放射線技師35人、検査技師58人、メデイカルスタッフ45人とこれまで以上に多くの有能な医療スタッフを充足させました。外来患者数は平均873人/日、入院患者数は平均237人/日、外科系を中心とした手術件数は年間3538件（うち全身麻酔下手術が2675件）と多くの患者様を診療し、さまざまな高度医療をご提供してきました。

また、2017年4月に成田に開設された本学医学部の関連教育病院として機能するため、医学生の実習・臨床医学教育の準備を進めています。高度な実地臨床のみならず臨床研究ならびに臨床教育機能においても、さらに高いレベルの病院機能をご提供できる体制を構築していきたいと考えています。

本年も皆様からのご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

山王病院

病院長 堤 治



東京大学卒、医学博士。前東京大学医学部産婦人科学教室教授、元東京職御用掛。日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医、日本生殖医学会生殖医療専門医、産婦人科PRP研究会代表世話人。

国際医療福祉大学の臨床医学研究センターである山王病院は、昭和12（1937）年の創設以来、オープンで安心な、思いやりのあるプライベートホスピタルとして歴史を築いてまいりました。

山王メディカルセンターと協力し、センター方式と通常の診療科をあわせて幅広い分野で外来・入院診療を行っています。出産はもちろん、女性医療に特化したリプロダクション・婦人科内視鏡治療センターでは、最先端の生殖補助医療と高度の内視鏡手術を多数行っています。

また、がん局所療法センターでは、ナノナイフですい臓がん・肝臓がんの低侵襲治療を行っています。アイセンサー（眼科）では、あらゆる眼科疾患に対応できる総合的な診療体制をとっています。

本年もご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

臨床医学研究センター

高木病院

病院長 林 真一郎



九州大学卒、医学博士。高木病院呼吸器センター長、国際医療福祉大学教授、佐賀大学医学部呼吸器内科臨床教授。

あけましておめでとございます。本年は平成から新たな元号にパトナツチする区切りの年であります。当院はグループ施設の母体病院として、創立109年となりますが、少子・高齢化の荒波をものにかぶる地域に立地し、正念場を迎えているところです。当院が地域住民の健康と生活の質を守り切ることが、同様の地域を多く抱えた本邦医療のあり方へのモデルであることを自負して、職員一丸となつての前進を決意しております。

昨年は女性腫瘍センターを開設し、婦人科領域腫瘍への取り組みを本格的に開始しました。また、併設の国際医療福祉大学「福岡シミュレーション医学センター」を活用したスタッフ教育が軌道に乗り、充実した訓練プログラムが走るようになりました。これまでに培われた資源を生かしつつ、グループ内外の連携をさらに強化して、地域の皆さんのお役に立ちたいと思います。本年もご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

附属病院

国際医療福祉大学病院

「クリスマスコンサート」を開催

当院恒例の「クリスマスコンサート」が12月15日、A棟1階正面入口前のロビーで開かれた。昨年に続き、国際医療福祉大学ハンドベル部が出演し、ハンドベルの美しい音色で「もろびとこぞりて」「きよしこの夜」「サンタが街にやってくる」など、11曲のクリスマスソングを演奏した。加えて、当院職員と演奏仲間の一般の方の2人が共演し、ピアノ、ギター、アルトサックスで昭和のなつかしい映画音楽やベンチャーズのヒット曲などを演奏した。



●ハンドベル部による演奏の様子

この日、診察にいられた患者様はもちろん、当院看護師やリハビリテーションスタッフに付き添われて入院中の患者様もお越しください。コンサートに来場者は83人となり、立ち見の方がいらつしやるほど盛況となった。お集まりくださった皆様は、なつかしいメロディーを口ずさむなどしながら、心癒される楽しいひとときをお過ごしください。

(総務課 平野幸宏)

附属病院

国際医療福祉大学塩谷病院

地域の児童・園児を対象に「手洗い教室」を実施

当院では、毎年インフルエンザの流行時期前に、矢板・塩谷地区の小学校・幼稚園・保育園を訪問し、「手洗い教室」を行っている。この活動は今年で9年目になり、地域の方々から好評を得ている。



●歌に合わせて正しい手洗い方法を紹介

例年10月から12月にかけて看護師3人がチームを組み、約20の施設を訪問。合計で約900人の児童・園児に指導を行っている。イラストや写真のスライドを用いて、手洗いやうがいの大切さ・マスクの付け方をわかりやすく伝えるとともに、「うさぎとかめ」の歌に合わせて正しい手洗い方法を紹介した。小学校では、子どもたちがブラックライトに反応するクリウムをばい菌に見立て手に塗った後、正しい手洗いに挑戦。その後、ライトに手をかざして洗い残しを確認した。挑戦した子どもたちからは、意外と洗い残しが多いことに驚きの声が上がっていた。今後も活動を継続し、子どもたちに手洗い・うがいの大切さを伝えていきたい。

(総務課 國分さやか)

附属病院

国際医療福祉大学三田病院

国際医療機能評価JCIの認証が更新されました

当院は12月3日から7日の5日間にわたり、国際医療機能評価JCI (Joint Commission International) の認証更新審査を受審した。JCIは「患者の安全」と「医療の質」に焦点を当てた評価基準を採用し、国際的に高く評価されている。当院は、2015年12月にJCIの認証を取得しており、今回が初めての更新審査となった。



●審査官によるラウンドの様子

審査は、JCIの審査官3人が約1200に及ぶ評価項目を細かくチェックする。実際に院内設備を見て状況を確認したり、病棟や外来で現場のスタッフに質問をしたりと、その方法は多岐にわたった。3年ごとの認証更新審査はその都度評価基準が厳しくなるが、職員の日頃からの取り組みが評価され、今回無事に認証を更新することができた。しかしながら、改善すべき事項も同時に指摘されており、JCI認証病院として、引き続き職員一丸となつてよりよい病院づくりに取り組んでいきたい。

(国際室 長谷川典昭)

附属病院

国際医療福祉大学熱海病院

「リハビリテーションの日」を開催

熱海伊東圏域・地域リハビリテーション強化推進事業が主催する「リハビリテーションの日」が12月2日、静岡県熱海市のいきいきプラザで開かれた。



●認知症予防に向けた運動を紹介

関係機関との連携強化、地域のリハビリテーション従事者の知識と技術の向上支援を目的に、県からの委託で、当院が広域支援センターを務めている。今年で5回目となるこのイベントは、毎年同市民向けに開催している。今回は「障害者スポーツ」をテーマに、順天堂大学医学部附属静岡病院の理学療法士、小林敦郎先生が講演した。このほか、2020年の東京パラリンピックの競技種目でもある「ボッチャ」の体験もあり、会場の雰囲気は大いに盛り上がった。続いて、当院理学療法士、宮嶋友也主任が認知症予防に向けた運動を紹介し、好評を博していた。この日は市民多数が参加し、運動を楽しみ、障害者スポーツを知る有意義な講演会となった。今後も、地域医療におけるリハビリテーションの充実を図るための活動を続けていきたい。

(総務課 堀口晃子)

臨床医学研究センター

山王病院

山王病院タペの「コンサート」

当院のエントランスを入って目にとまるのが、ロビー中央に位置するグランドピアノ「ペーゼンドルファー・インペリアル」だ。このピアノは、一般のピアノより鍵盤が9鍵多い97鍵ある国内でも数少ない貴重な楽器で、高さ27メートルの吹き抜けのロビーでは、パイプオルガンのような迫力ある響きから、ささやくような繊細な表現まで、豊かな音色を奏しむことができる。当院では、このピアノを中心に、15年以上前から毎月コンサートを行っており、外来・入院の患者様をはじめ、近隣にお住まいの方やお子様連れの方に好評を博している。これまで、国内外で活躍する多数の奏者に演奏いただいており、「このピアノが弾きたい」と、ご出演くださる方もある。



●コンサートの様子

1月は2度のコンサートを開催した。12日に行われた「新春ドクターズコンサート」では、

「コンサート」では、当院の医師やスタッフを中心としたメンバーによるピアノや管・弦楽器、お箏で新春にふさわしい音楽が披露された。また、25日のニューイヤークコンサートは、一流ソプラノ歌手とピアノ・アンストによる華やかな共演となった。

(総務課 山本悦子)

さんのお健康講座「呼吸教室」

当院では月に一度、一般の方向けに、「さんのお健康講座」をさまざまなテーマで開催している。12月の「呼吸教室」は、今回で16回目となる毎年恒例の企画だ。例年人気が高く、毎年楽しみにしている受講者も多く、事前申込者は100人を超え、当日会場は満席となった。



●須藤英一医師の講義

須藤英一呼吸器センター内科副部長のユーモアを交えたトークによる、風邪・インフルエンザの基礎知識や最新情報についての講義の後、理学療法士による呼吸体操、看護師からはインフルエンザの予防法、管理栄養士による風邪予防に効果的な食事について、各専門スタッフからの講義もあり、わかりやすく好評だった。

来場者アンケートからは、「毎年楽しみにしており、この時期に講義を聞

塩谷看護専門学校

ナイチンゲールの「看護の精神」を継承

本校第13回生の「看護の誓いの式」が12月13日、同校で行われた。入学してから8カ月、39人の学生たちは、看護に必要な学習を積みながら、本



●キャンドルの灯火

(総務課 山本悦子)



●講義に熱心に耳を傾ける受講者たち

くことでその冬を健康に乗り切ることができる」「インフルエンザやその予防について知らないことも多く勉強になった」「須藤先生のお話はもちろん、各専門職のお話もとてもよかった」などの声がかれた。リピーターが多いこの講座だが、今回は20人ほどの新規受講者を得ることができ、今後、他の健康講座参加や受診につながることを期待したい。

道に進んでいくのか、自らの気持ちをつかりと見つめる期間を過ごし、この日を迎えた。



●全員でナイチンゲール誓詞を唱和

ほの暗い会場で厳かに行われた式典では、学生一人ひとりが手にしたキャンドルに火が灯され、全員でナイチンゲール誓詞を唱和した。その後、キャンドルを手に、暗い会場内を巡回。学生は、クリミア戦争の際、暗い病室でランブを手を傷病兵の看護にあたったナイチンゲールの姿に思いを馳せたにちがいない。



●会場内を巡回

キャンドルの灯火は、看護の精神(心)を表している。この看護の精神を受け継ぎ、そして受け継いだ灯火を絶やすことなく燃やし続ける。ナイチンゲール像からいただいた灯火にはそんな意味がある。幻想的なキャンドルの灯火に学生たちは、看護をめざした思いを大切に、これからどんな看護師になりたいのか、自分の心としっかりと向き合い、決意を新たにしたいものと思う。そして、受け継いだ看護の精神を胸に刻み、これからスタートする初めての臨地実習に臨んでほしい。

(副学校長 飯塚千歳)

海外
保健福祉事情

2018年度も夏季休暇中に約2週間の総合教育科目「海外保健福祉事情」が実施された。今年度より夏季研修先に新たにモンゴルが加わり、渡航先は15カ国25研修先参加学生数は700人に上った。

渡航先により研修内容は若干異なるものの、参加学生は現地スタッフや引率教員のサポートのもと、現地の医療福祉施設の見学や現地学生や職員との文化交流(TOMODACHI HOUR)、市内見学を行い、それぞれが学び多い有意義な研修を過ごした。

今号では前号に掲載できなかった12カ国20グループのレポートを紹介する。また、冬季研修では今年度初めてハンガリーへ研修グループを派遣する。冬季研修参加学生はこれから事前説明会や準備等で忙しくなるが、研修を心待ちにしているようだ。

(大田原キャンパス国際室 田所清美)

韓国
乙支(ウルチ)大学校

日韓学生・教員の温かさ

福岡保健医療学部 医学検査学科
2年 石川愛梨

8月2日から12日までの11日間、私は韓国の乙支大学校の研修に車椅子を利用して参加した。研修中は全員で施設内を見



●施設見学の様子



●TOMODACHI HOURに参加した韓国の学生と記念撮影

学したので、他職種についても知ることができた。また、多くの観光地で韓国の文化にも触れることができた。施設の移動中や公共交通機関を使用する際は韓国の学生が付き添いでサポートをしてくれた。地下鉄の駅によってエレベーターが無かったりと少し不便だったが、韓国の学生だけでなく他キャンパスの学生や先生方が快く手伝ってくれた。

今回の研修で韓国の医療体制を学んだ文化に触れる貴重な体験をすることができたのはもちろんだが、困った時に支えてくれる人がいることに改めてありがたみを感じた。



●観光地での様子



●韓国のお店で全員で食事をする

韓国
仁済(インジエ)大学校

学生が言葉の壁越え交流

成田保健医療学部 作業療法学科
講師 圓純郎

本研修は8月2日から12日まで韓国・仁済大学校で行われた。参加者は教員2人と成田福岡、大川キャンパスの学生28人(NS3人、PT12人、OT7人、ST6人)であった。研修内容は、韓国語講座、韓国の医療制度やNS・PT・OT・STに関する講義、病院見学、韓国料理の調理実習や文化体験など多種にわたっていた。両大学の学生も最初から打ち解けており、言葉の壁を乗り越えて交流している姿に本研修の意義を実感することができた。何より仁済大学校の先生や学生のおもてなしが手厚く、教員・学生ともに大いに感動した。初めて海外に出る学生も多くいたが、今回の体験を糧にして今後も広い視野を持った医療職として学んでいってほしい。

韓国
建陽(コニャン)大学校

充実したプログラムと交流

総合教育センター 語学教育部
准教授 福井謙

建陽大学校での研修はここ数年、最多数を占めている。今年度は8月9日から19日までとお盆を挟む形となったことから当初、参加希望者数の減少が懸念されたものの最終的には東京赤坂を除く全キャンパスよりNS・PT・OT・STの4学科68人と、やはり最多の学生を迎えての実施となった。

世界レベルの病院見学し感激
福岡保健医療学部 医学検査学科
2年 堤庸晃

私は今回の研修が初めての海外だった。初めてということもあり、研修が楽しみだったが、それと同時に緊張と不安な気持ち



●臨床病理学科実習「輸血不適合の事例と交叉交雑試験」のひとコマ(採血体験)

ちがあった。実際に韓国に行く韓国の方々がとても親切に接してくださり、楽しい研修となった。「何か困ったことがないか」「食事は辛くないか」といつも私達に気を配ってくれださり感謝してもしきれないと思

った。施設見学ではいくつかの病院を見学した。その中でも慶北大学漆谷病院は世界レベルの医療を提供されている病院でとても感激した。検査方法を韓国と日本で比較すると異なった点があり、とても勉強になった。

この海外研修で学んだことを忘れずにこれからも頑張りたいと思った。

中国
中国リハビリテーション
研究センター

実習で

日ごろの学習成果確認

成田保健医療学部 作業療法学科
助教 石井清志

今年度の中国研修には学生12人(福岡1人、大川2人、小田原1人、成田8人)、教員2人が参加した。学生はセンター内の看護、理学、作業、医学検査の各部門で現地スタッフの指導の下、実習を行い日頃の学習の成果を確認するとともに、日本と中国との医療制度の違いについても知見を深めた。

研修以外にも中国茶や古琴(中国の琴)、水墨画といった中国文化にも触れる機会があり、これらの体験を通じてより一層、中国を身近な国として感じることができた。研修当初は不安気だった学生も研修後半では現地スタッフと積極的に交流し、学ぶ姿勢が随所にみられ非常に頼もしく感じた。

病室にカーテンなく
驚く

成田保健医療学部 作業療法学科
2年 大江笑西

中国の研修では、文化の違いによるケアの環境の違いを実感した。中国ではプライバシーの問題よりも患者同士のコミュニケーションを大切に考えており、病室にカーテンがなく日本と重



●天安門広場での集合写真

要視する事柄が違うことに驚いた。病院実習では、患者さんに直接触りハビリの一部を実施した。短い期間にも関わらず、ROM・MMT等、様々な検査を指導していただき、とても貴重な経験になった。

また、病院の中には中医治療科があり、按摩・鍼灸・漢方薬を提供していた。この科の患者数が最も多く、中医という中国特有の医療が民間に広く浸透していることが印象的だった。現地の方々の温かい支援のおかげで、とても充実した研修を送ることができた。

韓国
大邱韓医(テグハニ)大学校

お茶や民族舞踊の文化体験も

成田看護学部 看護学科
講師 天野敏江

大邱韓医大学校での研修に学生49人と2人の教員で引率した。主に医療検査を中心とした病院の施設見学や大学での講義を受け、お茶や民族舞踊などの文化体験も行った。教職員・学生の皆さんには大変細やかな気遣いと心温まるおもてなしをしていただき深く感謝している。学生達は、TOMODACHI HOURの人間知恵の輪やドッジボールなどで徐々に打ち解け、韓国の庶民的料理であるキンパツ(日本の海苔巻き)やトッポギを一緒に作り、週末には大邱の街を案内してもらい交流を深めることができたようだった。このような交流こそが、互いを理解しようとする土壌を育み、国際性を養うことにつながるのだらうと感じた。

台湾
元培医事科技大学

小籠包作りやディアボロ体験

福岡保健医療学部 医学検査学科
2年 下迫仁子



●記念撮影(大千総合病院にて)

11日間の台湾での研修は非常に充実したものであった。大学舎では中国語講座や医療事情についての講義や、小籠包づくり、ディアボロ体験などの文化交流を行った。病院見学ではヘルスプロモーションに特化した台安医院、他の医療・介護施設と連携し包括的なケア体制を整えている大千総合病院などそれぞれの特色ある施設を見学させていただいた。

研修中、常に私たちを支えてくださったボランティアの方々と言葉の壁を越えて全員で笑いあえるようになった時の喜びは何物にも代えがたいものであった。研修を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、視野を広く持つ医療従事者をめざし、今後の勉学に励んでいきたい。

インドネシア
ウダヤナ大学現地学生と
プレゼン資料作り小田原保健医療学部 作業療法学科
准教授 篠崎雅江

8月4日から14日までの11日間、学生27人と引率教員2人でウダヤナ大学の研修に参加した。今年度の研修はUdayana International Summer School 2018と同時開催であり、インドネシア各地の大学生と交流する機会を得た。言語の異なる学生同士がプレゼンテーション資料を作り、外国の教員の前で、英語で発表した経験は自信につながったと思われる。



●オープニングセレモニー。撮影直後に地震が起きた。

また、今年度はウダヤナ大学学生委員会のボランティア学生が運営協力しており、研修期間中は手厚いサポートを受けた。プログラムには世界遺産探訪や伝統舞踊鑑賞、マリンスポーツなどの文化体験も数多く盛り込まれていた。研修全体を通じて、多くの方々のご協力の下で無事に研修を行うことができた。この場を借りて感謝申し上げたい。

シンガポール
シンガポール工科大学

先進的な医療・学習環境

福岡保健医療学部 理学療法学科
2年 大曲未玖

8月3日から13日にかけて、シンガポール工科大学（SIT）で研修を行なった。研修ではシンガポールの医療制度や現状等を学んだ。



●ナショナルデーのピックイベントで



●SITの先生、学生との集合写真

SITにはCITSキャンデータをもとに実寸大サイズで3D解剖をできるアナトメーजीテーブルという学習機器等があり、学生のための設備も素晴らしい。シンガポールの病院は植物園と見間違えるほど緑に囲まれた環境で、患者様の癒しかつ省エネにもなるこの医療環境を日本もぜひ取り入れていくべきと感じた。

一方でTOMODACHI HOURを通して老人ホームの方々やSITと楽しく交流し、研修期間中にはシンガポール

の独立記念日を体験でき、この国の歴史に思いをはせることができた。現地の医療や文化や歴史、人の温かさに触れた有意義な経験となった。

シンガポール
ナンヤン・ポリテクニク

今後の学習・実践に重要な糧

保健医療学部 理学療法学科
准教授 渡邊観世子

今年度の夏季NYP研修は、4キャンパスの合同チームであり、海外旅行の経験がない学生も多かったため、初めて出会う人や国の文化の中で戸惑いもあったと思う。しかしそのような状況でも積極的に様々な人達とコミュニケーションをとり、意欲的にシンガポールの医療・福祉制度や文化を学ぶ姿勢が見られ、有意義な研修になった。



●シミュレーション演習での集合写真

シンガポールの医療・福祉制度の特徴である、自身の健康に責任を持つこととハンディを持つ人達を身近な人が支えるという考えに触れた経験は、これから日本での医療・福祉を学び実践していくために重要な糧となると思う。

医療格差
異なる思考に驚き保健医療学部 理学療法学科
2年 石野智香

シンガポールは富豪と貧民との間に医療格差があり、健康管理は個人の責任で行うという原則を立てているため、平等が当たり前の日本とは思考が非常に異なりました。



●施設見学

また「日本と同様に医療人不足に苦悩している」と講義で話された。そこで対策として、外国人の雇用を進めていた。このような雇用制度を取り入れることで医療人不足は少し改善できると考えられる。講義を通して、グローバル化が進んでいる現代ではこのような思考も重要であることを学んだ。

シンガポール人には私たちにない思考が多くあった。これらの思考をこれからの私の人生に取り入れていきたい。

オーストラリア
TAFEゴールドコースト

人と人とのつながりが大切

小田原保健医療学部 理学療法学科
2年 村松雅也

オーストラリアの研修では、現地の医療事情を学ぶことができた。そして、研修全体を通じて感じることもあった。それが人と人とのつながりである。現地において、訪問させていたいただいた施設の方々、ホストファミリーの方々、他キャンパスの方々など様々な方々との交流をさせていただいた。その交流の中で、今後重要なコミュニケーションの向上、人と人とのつながり「be connected」の大切さを実際に現地で実感することができた。この研修を通じてしかわからないことを今後の自分の糧として成長させていきたいと思う。



●ホストファミリーの方々とのTOMODACHI HOURでの交流

医療福祉のダイバーシティ

保健医療学部 言語聴覚学科
講師 平田文

オーストラリア夏季2班チームは、9月1日から13日の約2週間にわたりゴールドコーストで語学とオーストラリアの保健事情を学んできた。参加者は、大田原、成田、大川の3キャンパス、総勢41人（学生39人、教員2人）の大所帯だった。



●グループ2Allamanda Private Hospital見学



●体格の大きな方用車椅子

語学研修は、TAFE内での座学とホームステイ先での実践的な学びの両輪で行なわれた。研修当初は消極的だった学生も、研修後半は身振り手振りを交えながら積極的にコミュニケーションを楽しんでいる場面が多く見られた。病院や老人ホームでの見学研修は、日本の保健事情との共通点や相違点を学んだ。特に、オーストラリアは多民族多文化国家であ

優しいホストファミリー

福岡保健医療学部 理学療法学科
2年 木場亮太

今回の海外研修において、私たちに与えてくれたことはホームステイであった。実際の生活では、英語を話すスピードが速く聞き取るのが大変であった。また、自分たちの要望を伝えるのも英語で話さないといけないのととても難しかった。しかしホストファミリーの方々はとても優しく、私たちの拙い英語を一生懸命聞き取ってくれた。不安であった食事についても美味しく、量も私たちに合わせてくれた。初めは不安だったが、終えてみるととても楽しく充実したものであった。



●研修中の様子

この研修での経験を生かして、グローバルな医療人をめざしたい。

オーストラリア
TAFEケアンズ

語学研修に適した環境

福岡保健医療学部 医学検査学科
助教 森山良太

●TAFEキャンパスでの集合写真

9月上旬、大川・成田キャンパスの学生計16人を引率してオーストラリアのケアンズへ向かい、約2週間の研修を終えた。学生達は研修期間中ホームステイしていたことに加え、毎日英語の講義があった。またケアンズには英語を母国語としない多くの外国人が滞在しており、その中で学生達は英語を共通語として積極的にコミュニケーションをとっており、語学研修として非常に適した環境であった。そして看護教育施設や老人ホーム施設の見学研修等もあり、オーストラリアの医療事情を学習することもできた。英語を不自由なく使いこなせるようになるには短い期間であったが、学生達にとって非常に有意義な研修となった。

生活スタイルの違い体験

福岡保健医療学部 医学検査学科
2年 西岡虎次郎

研修ではオーストラリアと日本の食文化や生活スタイルの違いを経験し、医療福祉制度について学習した。英語を用いて自分の意見を伝える事は困難であり、自身の英語能力の低さを痛感した。オーストラリアは労働者に対する擁護意識が強く、労働者の働く環境整備に関して日本と比較し先んじていると感じた。また、介護保険も充実しており、オーストラリア独特の医療に関する法律について学ぶことが出来た。研修に参加した学生は研修期間、大変有意義な時間を過ごすことができた。研修に対して不満を抱く点は無く、個人的に再度オーストラリアを訪れたいと感じた。



●英語授業風景

オーストラリア
グリフィス大学

素晴らしい学生らの適応力

福岡看護学部 看護学科
准教授 川口賀津子

グリフィス大学での研修には、学生27人、引率教員2人で参加した。成田・福岡両

2国間で異なる医療制度

福岡看護学部 看護学科
3年 永田萌華

今回の研修を通して、医療英語や日本との医療の違いについて学ぶことができた。オーストラリアは日本と同じ先進国であり、技術や医療問題においては類似点が多々見られるが、保険などの医療制度は大きく異なり、2国間の違いをグリフィス大学での授業や施設見学を通してより深く学ぶことができた。

また、医

療の側面だけでなく文化についても多く触れる機会があった。オーストラリアでの研修はホームステイでの生活が大きな特徴であり、現地の方と密にかかわることができたためとても有意義なものとなった。

今回の研修で言語や文化・医療などの知識の幅を広げることができた実感したため、得られた知識を今後の勉学や将来に生かしていきたい。



●グリフィス大学研修修了式

モンゴル
モンゴル医科大学

大自然の美しさと力強さに感動

福岡保健医療学部 作業療法学科
教授 濱本邦洋

チンギスハン空港に8月29日夜到着。気温13度。猛暑の日本から来た我々には肌寒く避暑地に来た気分である。

JICA事務所と日本大使館、モンゴル第3病院、外傷センター病院、国立リハ



●チンギスハン像テーマパーク(ウランバートル郊外のテレルジのエルデネ村にて)

ビリセンター病院、老人施設等の施設見学。お世話になったモンゴル国立医科大学見学と両大学の学生交流も行われ有意義な研修であった。観光はウランバートルから70km離れたテレルジ。チンギスハン像や巨大な亀岩の見学後、遊牧民ゲルでの1泊キャンプ。バスで草原地帯に入ると羊・牛・馬とゲルが多くなり、なだらかな山々や森林と岩に四方を囲まれた景色が迫ってくる。自分の目と体で体験しなければわからない大自然の美しさと力強さに感動、我を忘れた。

イギリス
イースト・アングリア大学

どの学科の学生にも役立つ

医学部 医学科
教授・総合教育センター主任 高須賀茂文

8月6日から16日までの11日間、14人の学生を教員2人で引率し、英国にあるイーストアングリア大学で研修を行った。同大は1963年に創設された比較的新しい国立総合大学だが、ノーベル文学賞受賞者のカズオ・イシグロ氏が卒業するなど教育や研究の水準は世界でもトップクラス。緑溢れるキャンパスは東京ドーム28個分という大きさで、映画「アベンジャーズ」のロケに使われたこともある。研修内容は、英国の健康保険制度や医療職に関する講義、病院や老人ホームの見学、コミュニケーション設備を使つての実習などバランスが取れており、どの学科の学生が行つても役に立つ。ほかの国と比べ費用は高いが、それだけの価値はある研修先だと思う。

あったのではなかろうか。ハノイ医科大学の学生は、日本の大学に進学が決まっている学生も多く、英語も日本語も話せていた。開発途上国とはいえ、その国で学ぶ同世代の学生の語学力や海外で学びたいという志が強いところは、見習うべきところがあった。今回の経験を糧に、知識としての学びだけでなく、学生としての個人の学習スタンスを考え、ていくきっかけにつながることも期待したい。



●ベトナムの麦わら帽子ノンラーと民族衣装アオザイを着てのTOMODACHI HOUR

日本が行う支援は何か考える

成田保健医療学部 理学療法学科
2年 渡辺華生

私たちは、ベトナムで医療体制や文化を学んだ。ベトナムは衛生環境が整っていない、OTやSTになるための専門学校がないなど、日本と異なる点が多かった。特に、保険制度の理由から最後までリハビリを行えずに退院する患者がいることには衝撃を受けた。他には、交通事情の理由から整形外科疾患の患者が多いなど、国の背景から学ぶこともあり、勉強になった。ベトナムの医療制度は他国からの支援を受けている面も多く、日本が行える支援は何か、考えるきっかけにもなった。11日間の研修を通して、日本では経験できない貴重な体験ができ、有意義な時間になった。この経験を生かして、これからも知識や技術の習得に励んでいきたい。

ベトナム
チョーライ病院、
ホーチミン医科大学

色々なことが日本と違う！

成田保健医療学部 医学検査学科
講師 木村明佐子

「とにかくいろいろなことが日本と違う！」ということが多くの学生の意見だった。人々、慣習・食事・街角の雰囲気・交通量様々なおお、そして医療システムや病院の様子。本研修には学生23人と教員2人が参加した。訪問先のチョーライ病院は国内最大規模というところもあり、患者さんとそのご家族であふれかえっていたことにみな驚きを隠せなかった。リハビリテーション部門では直接患者さんと接し、臨床検査部門では日本では稀な寄生虫疾患の実標本を観察することができた。ベトナム戦跡を訪ね、悲しい歴史と当時の人々の暮らしも学んだ。文化・慣習の異なる異国の地で人々と触れ合うことで考え方の違いを学び、学生は大きく成長できたようだった。



●研修先のチョーライ病院でお世話になった先生方と

今も続く多くの国からの援助

保健医療学部 視機能療法学科
2年 大野梓

9月1日から11日まで、ベトナム南部のホーチミン市での研修に参加した。他キャンパスの学生とともに、ベトナムの歴史や

フィリピン
フィリピン大学

多様な医療福祉施設を見学

福岡保健医療学部 言語聴覚学科
講師 義田俊之

フィリピン大学の教職員の方々の人念な準備と温かな対応のおかげで、充実した研修になった。Caringの病棟、新設されたばかりの発達障害児のためのフロアー、高齢者と発達障害児のためのcommunity-based practiceなど、多様な医療福祉施設を見学でき、どの施設のスタッフの方も学生たちの質問に熱心に答えてくださった。また、フィリピン大学の学生さんたちは明るくて打ち解けやすく、ゲームや会話を通じて交流が進んだ。成果報告会では、フィリピンでの研修で体験したことはもちろん、日本の医療職の職務や教育の内容まで、学生たちが英語でプレゼンした。今回の体験が今後の学びの糧になることを願う。

留学生秋の遠足 大田原キャンパス

大田原キャンパス恒例の留学生秋の遠足が11月11日に行われ、2012年度以来6年ぶりに陶器の町として全国的にも有名な栃木県芳賀郡益子町を訪れた。

総勢24人の参加者は早朝大田原キャンパスに集合し、一路バスで益子町へ向かい、最初の訪問地、同町中心部に位置する日下田藍染工房へ。江戸時代に作られたといわれている重要文化財の茅葺屋根の工房で、現在では貴重な技術となっている日本の藍染について、県指定無形文化財工芸技術保持者の日下田正氏にご説明いただき日本の繊維産業の歴史に触れることができた。

次に1937年創業の造り酒屋、外池酒造店を訪れ、工場見学や写真撮影を行い、留学生は家族や先生へのお土産



●益子焼カップへ絵付け体験



●日下田藍染工房にて

産を購入するなどして楽しんだ。最後の目的地、益子焼窯元共販センターでは、皆で昼食をとった後、メイニイベントでもある益子焼のカップへの絵付け体験を行った。係の方のレクチャーを受け、参加者はそれぞれデザインに頭を悩ませながら、2カ月後の焼き上がりを楽しみに、自分だけの益子焼の制作にいそしんだ。

今年度は例年よりも開催時期が遅くなったため、学内行事と重なり参加生が例年より少なかったのが残念だった。しかし、学科の垣根を超え、留学生同士や国際関係の教職員との交流が図れる貴重な機会として、今後も継続して実施していきたいと考えている。

(国際室 森島公美)

【平成30年度 学位記授与式】

■学部／大学院 学位記授与式

- ・大田原キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年3月13日（水）10：20～
会場：那須アスリーナ（体育館）1階
- ・小田原キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年3月8日（金）10：20～
会場：本校舎6階講堂・ラウンジ
- ・福岡キャンパス・大川キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年3月11日（月）13：00～
会場：福岡国際医療福祉学院 体育館

■大学院 学位記伝達式

- ・東京赤坂キャンパス
日時：平成31年3月16日（土）16：30～
会場：東京赤坂キャンパス3階 302/303教室

■卒業式

- ・塩谷看護専門学校
日時：平成31年3月6日（水）10：00～
会場：塩谷看護専門学校講堂

【平成31年度 入学式】

■学部／大学院 入学式

- ・大田原キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年4月5日（金）10：20～
会場：那須アスリーナ（体育館）1階
- ・成田キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年4月3日（水）10：20～
会場：成田国際文化会館
- ・東京赤坂キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年4月2日（火）15：00～
会場：東京赤坂キャンパス講堂
- ・小田原キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年4月4日（木）10：20～
会場：城内校舎 体育館
- ・福岡キャンパス・大川キャンパス（学部／大学院）
日時：平成31年4月7日（日）11：00～
会場：大川キャンパス講堂

■入学式

- ・塩谷看護専門学校
日時：平成31年4月8日（月）10：00～
会場：塩谷看護専門学校講堂

広報誌 IUHW 116号 発行：学校法人 国際医療福祉大学

〔大田原キャンパス〕
栃木県大田原市北金丸2600-1 ☎0287-24-3000
〔成田キャンパス〕
千葉県成田市公津の杜4-3 ☎0476-20-7701
〔東京赤坂キャンパス〕
東京都港区赤坂4-1-26 ☎03-5574-3900
〔小田原キャンパス〕
神奈川県小田原市城山1-2-25（本校舎）☎0465-21-6500

〔福岡キャンパス〕
福岡県福岡市早良区百道浜1-7-4（1号館）☎092-407-0805
〔大川キャンパス〕
福岡県大川市榎津137-1 ☎0944-89-2000
編集：広報部 ☎03-5574-3828
デザイン：野佐デザイン



医療福祉の多彩なエキスパートを育てる。

国際医療福祉大学

ホームページでもご覧いただけます。
<https://www.iuhw.ac.jp/>

©国際医療福祉大学2019 Printed in Japan 禁無断転載・複製

印象深いチャリティー病院

福岡保健医療学部 理学療法学科
2年 小川拓海



●交流を深めたTOMODACHI HOUR

フィリピンでの海外研修を終えて、様々なその国独自の医療政策、日本との医療環境の違いを目にし、実際に触れ、多くのことを学ぶことができた。多くの病院を見学した中で、自分にとって最も印象に残っている病院は、生活に苦しんでいる人のために作られた、無料で受診できるチャリティーの病院である。その病院ではPT、OT、ST、看護師といった医療従事者が働いているが、人手不足で学生がそこで働いている姿もあった。全体の設備としては、普通の病院と違って待合室が外にあたり、ベッドとベッドとの間に仕切りがなかったりなど不十分な部分があった。医療現場では小さい子供たちを対象にしたリハビリ、運動の訓練を行っているのを多く目にし、説明してくださった現地の先生方に丁寧な現場での医療について様々なことを聞くことができたので、とてもよい経験になった。

★ミャンマー ヤンゴン看護大学、 ヤンゴン医療技術大学

毎日異なる施設を訪問

小田原保健医療学部 作業療法学科
講師 岩上さやか

ミャンマーと聞いてどの様な国を思い浮かべるだろうか。確かタイの横の...と曖昧な

情報しか出てこない方も多いのでは。ミャンマーは人口約5500万の多民族国家で9割が仏教徒のミャンマー語を話す国である。その最大都市ヤンゴンで各キャンパス各学科から16人の学生と引率教員2人の総勢18人で12日間の研修を行った。



●ヤンゴン医療技術大学の学生達と

本研修では看護大学、総合病院、リハビリテーションセンター、高齢者施設等、毎日異なる施設を訪問した。これに加え、現地学生や対象者との交流等内容も幅広いものであった。学生は常に意欲的で、言葉の壁を越え活動する姿が印象深かった。将来海外での活動を視野に入れている学生もあり、貴重な体験となったに違いない。

聾学校の子供たちの笑顔に力

成田看護学部 看護学科
2年 鈴木千穂

ミャンマーは敬虔な仏教徒の国であり、ゴダの荘厳な姿が印象的である。ヤンゴン看護大学・医療技術大学をはじめ、様々なミャンマーの医療・福祉の現場を訪問し、多くの方に関わることができた。心温まるご厚意に深く感謝する。

現在、ミャンマーは、急激に経済発展してい

るが長年にわたる経済的不安定により国内の医療整備の遅れがある。貧富の差が伴い、衛生環境の提供やPTやOTといった医療者が不足している。しかし、何処でも元気に活躍している女性や学生達と派遣された人達の熱意、家族の支え合い、聾学校の子どもの笑顔にパワーを感じた。近い未来、ここで出会った方々がさらに活躍している姿を想像し、共に邁進していきたい。



●研修先での集合写真

●ラオス

国立健康科学大学

工夫重ね奮闘する医療従事者

成田看護学部 看護学科
助教 川村崇郎

ラオスに滞在中、ビエンチャン市内を中心に我々は6つの病院を訪問した。ラオスでは、文化的背景や医療を提供する環境、人員や専門職の配置、医療資材や機器等日本とは様々な異なる点に学生も教員も驚きの連続であった。マンパワーや医療資材、機器が必ずしも十分とは言えない環境下において、日々工夫に工夫を重ねて臨床現場で奮闘するラオスの医療従事者の姿から、私は医

療職としての誇りを感じた。物資や経済的に恵まれた環境に慣れしてしまった我々は、ラオスの医療従事者の姿からチャレンジ精神や環境に合わせた創意工夫の精神を学ぶべきであろう。

実感した「おもてなし」精神

保健医療学部 作業療法学科
2年 木村香菜

ラオスという私の人生であり馴染みのなかった国へ、私は海外研修で訪れた。治安は良いだろうか、話は通じるだろうかと不安を抱えたまま現地に着いたが、その不安はあつという間になくなった。



●最終日に行ったラオスの伝統儀式「Basy」の後にラオスの学生と

その大きな要因は、ラオスで出会った方々がみんな親切であつたということだ。特に今回お世話になった大学の学生さんは、病院見学中はもちろん、放課後や休日にもかかわらず私たちと行動を共にしてくれた。伝統料理の食べ方から現地の方への通訳まで何でも親身になって関わってくれた彼らには感謝の気持ちでいっぱいである。日本特有だと思っていた「おもてなし」の精神を海外で感じる事ができた貴重な経験となった。



小田原キャンパス「国際 Sunflowers」

小田原保健医療学部的女子バスケットボール部です。私たちは、現在2年生6人、1年生5人で活動しています。中学・高校でバスケットボールを経験した学生や、バスケットボールが好きな学生が集まり、楽しく活動しています。毎週金曜日の午後5時から8時半まで練習しています。男子バスケットボール部と合同で体育館を使っており、練習メニューなどお互いに意見を交換し合いながら練習を進めています。練習内容は簡単にフットワークなどのウォーミングアップをしてから、両チーム5人ずつでゲーム形式の「5対5」を行っています。5対5をやっていく中で気がついた良かったプレー、悪かったプレーを話し合い、試合で活かせるようにしています。



試合は、春と秋にあります。神奈川県内の大学が集まり、1部と2部に分かれて試合をします。現在、私達は2部に所属し、2部の中で全勝をめざしています。練習時間は週に1回でとても少ないのですが、試合では他大学と戦えるように頑張っています。

私が大学に入学して初めて参加した春の大会では、先輩達が試

合中色々な意見を出し合っていて、高校生とは違う大学生のバスケットにとっても感動したことを覚えています。入学したばかりで分からないことが多い中でも、先輩達と楽しく活動できました。

今年度の春の大会では、2部リーグで優勝することができました。簡単に勝てた試合もあれば、接戦の末、勝つことができた試合もありました。どの試合もとても楽しかったのですが、特にこの大会の最終試合がとても印象に残っています。3年生の先輩はこの大会で引退が決まっていた、この試合が最後という状況でした。チーム全員が、試合に勝利し笑顔で楽しく終わりたいという気持ちで試合に臨み、その試合も勝つことができました。試合後、1人の先輩が「勝因の1つとしてこのチームの仲の良さがあげられる」と言っていました。私達のチームはとても雰囲気良く、仲が良いことが自慢だと思っています。



小田原保健医療学部理学療法学科 2年 部長 松永理沙



赤坂氷川山車を初めて清掃

昨年4月の東京赤坂キャンパス開設以来、エントランスに常設展示している赤坂氷川山車の清掃を本学として初めて11月30日に行った。この清掃は、毎年9月に行われる赤坂氷川神社の祭礼「赤坂氷川祭」のあとに実施する恒例行事。

赤坂氷川山車保存会や関係者の方々の指導を受けて、赤坂心理・医療福祉マネジメント学部の1年生で構成される赤坂同好会が清掃した。学生たちはお揃いの法被を着て慣れない手つきで一生懸命に取り組んでいた。

